

# 鳥瞰図にみる近代

—草津温泉を事例として—

関 戸 明 子

- I. はじめに
- II. 鳥瞰図研究の動向
- III. 作成主体と構図の特色
  - (1) 対象とする資料と作成主体
  - (2) 構図の特色
- IV. 案内情報と描かれた図像
  - (1) 案内情報の特色
  - (2) 描かれた図像の変化
  - (3) 共同浴場の変遷
- V. おわりに

## I. はじめに

本稿では、鳥瞰図に関する研究動向を押さえた上で、事例を通して「近代の歴史地理」の課題について考えていきたい。そこで、草津温泉を描いた鳥瞰図を素材にして、景観復原という歴史地理学の伝統的な課題に対する利用のあり方を示すだけでなく、作成主体や構図、描写内容の変化などについて、社会的背景を踏まえながら考察していく。

1980年代、欧米の地図史研究においてパラダイム転換がみられ<sup>1)</sup>、日本においても地理思想史研究の影響や荘園絵図研究の興隆などがあった。古地図・絵図に関する研究が活発となった。そうしたなかで、大きな契機となったのは、1981年に発足した葛川絵図研究会の活動であろう。その成果をまとめた『絵図のコスモロジー 上・下』には、葛川絵図

の分析も含めて、20を超える論考が収められている<sup>2)</sup>。ただし対象とした時代は中世が多く、近代を扱ったのは、地籍図の作成過程を考察した1本のみであった<sup>3)</sup>。葛川絵図研究会の立場は、絵図を利用した研究ではなく、絵図そのものの研究の手順を探り、描き手が情報を図像化していく基準（コード）を明らかにし、表現されたものから、地域像や世界像にまで接近していくことにあった<sup>4)</sup>。そのため、前近代と比べて図像化の基準の明瞭な近代の地図は、考察の対象にならなかったであろう。

一方、近代を対象とする歴史地理学研究では、明治期以降、科学的測量に基づく官製地図が整備されたこともあって、従来、民間製作の地図に着目されることはほとんどなかったが、次第に研究の蓄積がみられるようになっていく。鳥瞰図をはじめとする民間地図は、官製地図とは異なる情報を有し、新たな研究を切り開く可能性を秘めた資料といえる<sup>5)</sup>。

絵画と地図の中間に位置する鳥瞰図は、科学的測量による図とは異なり、作成主体の個性を見出しやすい。本稿で取り上げる草津温泉の鳥瞰図は、民間において製作され、出版、販売されてきたものである。草津の図は出版点数が多く、近世から昭和初期まで継続的に刊行された。そのため、多くの鳥瞰図が残されており、経年的な変化を考察するのに適している。

キーワード：近代、鳥瞰図、絵図、草津温泉

矢守一彦は、俯瞰図一般のうち、透視図法に則るものを鳥瞰図としたが、他方で、透視図法を用いることを条件とすれば、江戸時代の鳥瞰図風の作品も、その大半は俯瞰図の範疇に入れられるべきものであったと述べる<sup>6)</sup>。そこで本稿では、鳥瞰図を幅広く扱うため、大久保純一による、高空のある一点を想起させる視座から、透視図法的な空間の理解にもとづき、広範囲の地表を俯瞰したものという定義に依拠したい<sup>7)</sup>。

## II. 鳥瞰図研究の動向

江戸時代における遠近法の受容については、岸文和の研究に詳しい<sup>8)</sup>。西洋の幾何学遠近法を利用して描いた「浮絵」のうち、屋外風景を描いた歌川豊春の「浮絵新吉原大門口図」の系譜には、1770(明和7)年頃を境として、新しい傾向が現れた。その新しさは、〈深さ〉を喚起するというよりも〈広大な眺望〉を説明的に描写することにあった。その説明は、広大な景観について、それをきわめて〈高い視点〉から俯瞰することによって行われた。さらに、享和年間(1801~1804)以後、「浮絵」から「洋風版画」や「風景版画」へと大きく変貌を遂げることになるという。

また、歌川広重を中心とした浮世絵風景画を考察した大久保純一は、名所絵はその場所の景観上の個性を示すと人びとの間で理解されているモチーフの組み合わせで構成されるべきものという考え方が、制作者側だけでなく、享受者の側にもあったのではないかと指摘する<sup>9)</sup>。そして、広重の作品が大きな成功を収め得た理由の一つに、景観の定型イメージを積極的に画面に取り込んだことをあげている。

これらで論じられた透視図法における視点の位置、名所景観の定型化といった問題は、近代の鳥瞰図を対象とする本稿においても、多くの示唆に富む。

今日における鳥瞰図への関心は、1990年代

後半から相次いで開催された博物館の企画展・特別展によって広められたといえるだろう<sup>10)</sup>。それに先駆ける研究としては、海野一隆<sup>11)</sup>や矢守一彦<sup>12)</sup>によるものがあり、鍬形蕙斎、亜欧堂田善、黄華山、五雲亭(歌川)貞秀などの作品が系譜学的に考察されている。

美術史の立場からの鳥瞰図研究として、岸文和は、都市鳥瞰図が描かれるのは早くとも18世紀末とされてきたが、はじめての都市鳥瞰図の制作を1769年頃としている<sup>13)</sup>。辻惟雄は、蕙斎・北斎・貞秀を取り上げ、透視遠近法という新しい絵画技法を媒体として、より大きな空間の全体像を表現する新しい俯瞰形式に向かう経緯をたどる<sup>14)</sup>。大久保純一は、歌川広重の東都名所24組を検討し、蕙斎・北斎・貞秀らに比べて、広重による東都名所の鳥瞰図は、透視図法による景観の再現性に重きを置いていると論じた<sup>15)</sup>。

こうした研究に加え、鳥瞰図の意味論的な考察への展開もみられる。ヘンリー・スミス<sup>16)</sup>や杉本史子<sup>17)</sup>の論考では、貞秀の鳥瞰図を題材に、幕末という状況のなかで、作品がもつ政治的意義を考察し、将軍上洛、長州戦争、戊辰戦争といった時事との関係から、その意味を問い直している。

近年の潮流の一つは、吉田初三郎の作品に関する研究の蓄積であり<sup>18)</sup>、書誌的なデータの整備が大きく進んだ<sup>19)</sup>。しかし、初三郎以外の絵師による近代の鳥瞰図については、一部を除いて<sup>20)</sup>、資料論的な検討も十分とはいえない状況にある。

そうしたなかで、明治から昭和初期の鳥瞰図に関する研究が中西僚太郎<sup>21)</sup>や筆者<sup>22)</sup>によって行われた。中西は、松島や巖島を描いた鳥瞰図の主題・構図・描写内容などを考察している。対象を写實的に表現した真景図の作成が盛んだったのは明治20年代から30年代前半で、明治30年代半ば以降、印刷写真や写真帖が登場するにつれて衰えていったという。筆者は、伊香保・四万・熱海という温泉

地の鳥瞰図を分析した結果、景観復原に有用な資料となること、文字記録に残されていない地域の実態を探る手段となることを明らかにした。また、構図や描写内容には、温泉の権利関係や利用形態、交通手段の変化などの関連がみられることを論じた。

以上、いくつかの先行研究を取り上げた

が、近代の鳥瞰図は各地に多く残されており、今後も考察の余地は大きいといえる。

### Ⅲ. 作成主体と構図の特色

#### (1) 対象とする資料と作成主体

本稿において考察の対象とする鳥瞰図を表1に示した。ここでは、吉田初三郎の作品

表1 草津温泉鳥瞰図の一覧と作成主体

No	名称	発行年	著作者・出版者・発行者など	形態
1	上州草津温泉大図	1810	文化7 版元/あふみ屋・としまや	縦
2	上州草津温泉図	1812	文化9 無記載	縦
3	上州草津温泉図	1821	文政4 無記載	横
4	上州草津温泉之図	1825	文政8 無記載	縦
5	上州草津温泉略図	1827	文政10 無記載	横
6	上州草津温泉の図	1840?	天保11? 無記載	横
7	上州草津温泉之図	1853	嘉永6 無記載	横
8	上州草津温泉之図	1855	安政2 版元/三寫屋四郎兵衛	横
9	上州草津温泉之図	1856	安政3 版元/一田屋	横
10	上州草津温泉之図	1859	安政6 版元/丁字屋	横
11	上州草津温泉之全図	1879	明治12 市川与平	横
12	上州草津温泉図并八景	1879	明治12 版元/大津屋	円
13	上州草津温泉之略図	1880	明治13 出版/折田佐吉(草津)・小林喜太郎(草津)・筆/豊原周春	横
14	上州草津温泉之全図	1881	明治14 編輯出版/福田熊次郎(東京)	横
15	上州草津温泉図并八景	1884	明治17 版元/大坂屋	円
16	上州草津温泉之全図	1885	明治18 宮崎五郎平	横
17	草津鉦泉場之図	1885	明治18 編輯出版/松田敦朝(東京)・売捌/栄覚堂(草津)・銅版製図/玄々堂(東京)	横
18	上州草津温泉之全図	1887	明治20 出版/宮崎五郎平(草津)	横
19	上州草津鉦泉全図	1887	明治20 著作発行売捌/宮崎常十・印刷/山本幸八(草津)	横
20	草津鉦泉場之図	1888	明治21 編輯発行/阿部善吉(東京)・印刷/岡野茂三郎(東京)・彫刻/向咲堂葎雲	横
21	上州草津温泉之全図	1888	明治21 著作/田原庄之助(東京)・印刷発行/阿部善吉(東京)	横
22	上州草津鉦泉全図	1889	明治22 著作印刷発行/阿部善吉(東京)	横
23	上州草津温泉図	1890	明治23 著作印刷発行/阿部善吉(東京)	扇
24	上州草津温泉図	1891	明治24 出版/坂上武平(草津)	円
25	草津鉦泉場之図	1891	明治24 編輯発行印刷/坂上武平(草津)・売捌/阿部善吉・彫刻/向咲堂葎雲	横
26	上州草津温泉図	1892	明治25 無記載	扇
27	上州草津鉦泉全図	1893	明治26 著作発行/宮崎常吉・印刷/山本幸八(草津)	横
28	上州草津温泉図	1893	明治26 著作印刷発行/阿部善吉(東京)	扇
29	上州草津温泉図	1896	明治29 著作印刷発行/阿部善吉(東京)	扇
30	上州草津温泉全図	1896	明治29 著者出版/宮崎団十(草津)・印刷/長谷川惣次郎(高崎)	横
31	上州草津温泉場真図	1897	明治30 印刷発行/阿部善吉(草津)	縦
32	上州草津温泉全図	1898	明治31 印刷発行/山本興平次(草津)	横
33	上州草津温泉場略図	1903	明治36 印刷発行/阿部善吉(草津)	横
34	上州草津温泉場略図	1905	明治38 編輯発行/山田治衛門(東京)・印刷/山田市太郎(東京)・編輯/一田屋常吉(草津)	横
35	上州草津温泉略図	1908	明治41 著者発行/藤本軍次(草津)・印刷/田村茂太郎(東京)	横
36	上州草津温泉真景図	1909	明治42 編輯発行/山田治衛門(東京)・印刷/山田市太郎(東京)・山田石版所(東京)	横
37	上州草津温泉真景図	1914	大正3 著作発行/戸丸国三郎(東京)・印刷/田島勤一郎(前橋)・発行/日本温泉協会	横
38	上州草津温泉真景図	1914	大正3 著作発行/鷺見知枝麿(東京)・印刷/鷺見文友堂	横
39	上州草津温泉真景図	1916	大正5 著作・発行/中澤麻吉(草津)・印刷/野村銀次郎(東京)	横
40	上州草津温泉真景図	1917	大正6 著作印刷/野村銀次郎(東京)	横
41	上州草津温泉真景図	1920	大正9 画作発行/萩原秋水・印刷/吾妻印刷所(中之条)	横
42	上州草津温泉真景図	1920	大正9 印刷/校友舎(東京)	横
43	上州草津温泉真景図	1922	大正11 著作発行/戸丸国三郎(東京)・印刷/池上半兵衛(東京)・発行/日本温泉協会代理部	横
44	上州草津温泉案内図	1926	大正15 画作印刷/鳥居元夫(高田)・発行/埼玉屋商店	横
45	上州草津温泉真図	1932	昭和7 発行印刷/戸丸国三郎(東京)・発行/日本温泉協会代理部	横
46	上州草津温泉鳥瞰図	1938	昭和13 画作発行印刷/松井哲太郎(松戸)・鉄筆/松井天山	横

注) No.6には天保11年との裏書きがある。形態とは温泉街を描いた図絵の部分の形を示す。

に代表される、遠く隔たった都市などを図中に取り取り込んで主要なポイントと交通ネットワークを誇張して描く、横長の折り本の鳥瞰図は除外し、温泉街を詳細に描いた図を取り上げている。また、刊年が明記されているもの、あるいはその手がかりがあるものに限定し、群馬県立図書館・群馬県立歴史博物館・群馬県立文書館・前橋市立図書館・草津町立図書館で資料調査した結果に、筆者が所蔵する図を加えた<sup>23)</sup>。

また、江戸時代の刊行図も、その変遷をたどるために取り上げている。以下では、江戸と明治という時代で区切るのではなく、鳥瞰図の表現に、継続と断絶がどのように認められるのかを意識して検討したい<sup>24)</sup>。草津温泉の鳥瞰図は、この表に掲げた以外にも多く現存するが、経年的な変化をたどるには十分であろう。

鳥瞰図は土産物として作成され、土地の案内や広告宣伝に使われた<sup>25)</sup>。表1に示した著作者などの書誌情報をみると、印刷は東京の業者であることが多いが、作成主体としては草津在住者が中心となっていることがわかる。たとえば、山本輿平次は町長を務めており、宮崎五郎平・宮崎常吉・宮崎団十は村会議員や町会議員となっている<sup>26)</sup>。

No.13を出版した折田佐吉は、同じ1880年に『草津温泉の古々路恵』という案内書を刊行している。最も出版点数が多いのは阿部善吉であり、1888年から1903年まで、その名が確認できる。当初は東京に住所があったが、のちに草津に移したことがわかる。また阿部は1889年に図絵中心の案内書『草津八勝』を刊行している。このように一枚物の図と案内書の双方にかかわっていることもある。

草津町に隣接する長野原町の萩原秋水（太一郎）は、No.41の鳥瞰図を自ら描くだけでなく、草津鉱泉取締所を発行元とした案内書を執筆している。案内書は1908年の初版から1926年の増補6版まで版を重ねた。5版の序

によれば、萩原は、初版のときは温泉取締所の書記長を務め、のちに草津馬車合資会社や草津の旅館の社長となったことがわかる<sup>27)</sup>。

一方、東京の業者が、草津以外にも複数の温泉地の鳥瞰図を刊行している場合もある。1905年から1909年にかけて、山田治衛門は草津だけでなく伊香保・塩原・那須の図を出している。さらに1910年代以降になると、戸丸国三郎が関東各地の温泉地の鳥瞰図と案内書を発行している。

## (2) 構図の特色

表1に示した鳥瞰図のうち最も大きな図は、No.1でタテ74cm×ヨコ54cmである。この図を含め、江戸時代には縦型の図がみられるが、幕末以降にはNo.31以外はすべて横型となっている。サイズは、タテ35～40cm×ヨコ50～55cm程度のもので大半を占める。それに対して、1920年代以降に人気を博した吉田初三郎の作品は、タテ18cm×ヨコ78cmといったサイズが多く、判型の違いは明瞭である。

草津温泉を描く定番の構図は、中央に湯畑<sup>28)</sup>と温泉街、その背後に薬師堂・光泉寺などを置き、遠景に白根山などの山並みを描くというものである。上空から俯瞰する視点は北東から南西に向いており、この定番の構図以外の視点の図は、1点しか確認できていない<sup>29)</sup>。草津では湯畑の北側が高台になっており、囲山公園から温泉街を眺めることができたため（図1）、大正・昭和初期の絵はがきでも、温泉街全景の写真は同じ方向から撮影されていた<sup>30)</sup>。

源泉である湯畑の末端には、近世以来、打たせ湯が設けられており、それを前面に、背後に薬師堂を描写することが、草津らしさを表現するのにふさわしい構図であったためと考えられる。ただし、湯畑と薬師堂の図像は時代が新しくなるにつれて小さくなり、周囲の建物との調和が図られていく。



図1 草津温泉の中心部と主要な共同浴場  
 基図は1988年修正2500分の1「草津町市街図」

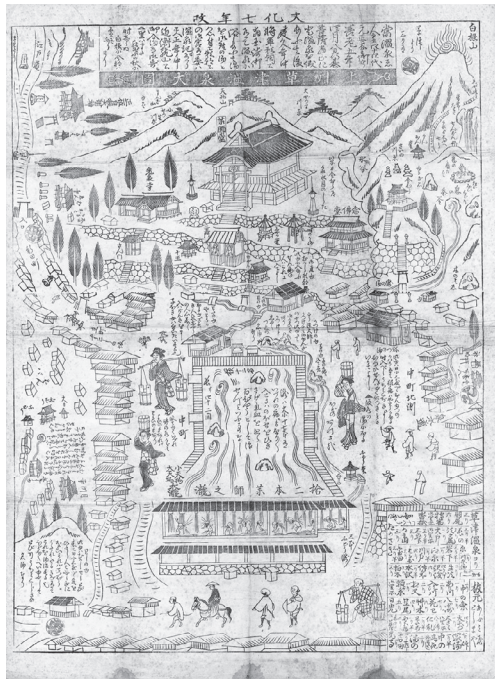


図2 「上州草津温泉大図」  
 (No.1, 1810年, 筆者蔵)

1810(文化7)年のNo.1は、鳥瞰図の定義によればその範疇に入らず、参詣曼荼羅図に類似する(図2)。図中の建物の向きが一定ではなく、人物の大きさもまちまちで、建物との釣り合いも取れていない。中央に湯畑、

その奥に薬師堂、右奥に白根山を大きく描き、共同浴場の脇にはそれぞれの効能が記載されている。No.2はNo.1を縮小した図となっている。

1821(文政4)年のNo.3と1825年のNo.4は、温泉街を俯瞰した図となるが、建物は斜投影の繰り返しで、遠近感はほとんど与えられていない。透視図法的な描写がみられるのは、1827(文政10)年のNo.5以降である(図3)。図の中央の湯畑から左上に伸びる江戸へ向かう道の街並みに、奥行きが認められる。ただし、図全体を統一した表現とはなっていない。No.6にも同じような街並みの描写があるが、この図は、打たせ湯にあたる人びとを周辺の建物より大きく描き、入浴中の情景を誇張している点が特徴的である。

1853(嘉永6)年のNo.7から1859(安政6)年のNo.10までの4枚は細部に違いがあるものの、構図はほぼ同じである。その後、1879(明治12)年のNo.11以降においても基本的な構図に大きな変化はない(図4)。1885年のNo.16と1887年のNo.18もこれらによく似ており、繰り返し模倣されたことがわかる。

上述のように、草津温泉を俯瞰した図は文政期に複数刊行されていた。1803(享和3)年頃の鋏形蕙斎「江戸名所絵」、1808(文化5)年頃の黄華山「華洛一覧図」をはじめ、19世紀に入ると都市を描いた鳥瞰図の流行が

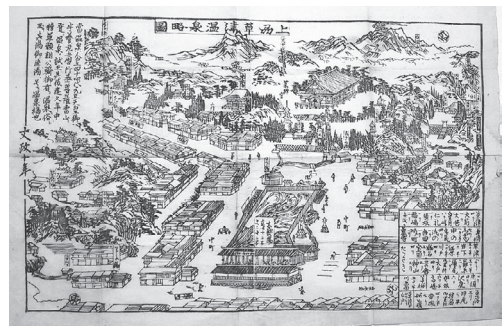


図3 「上州草津温泉略図」  
 (No.5, 1827年, 群馬県立歴史博物館蔵)

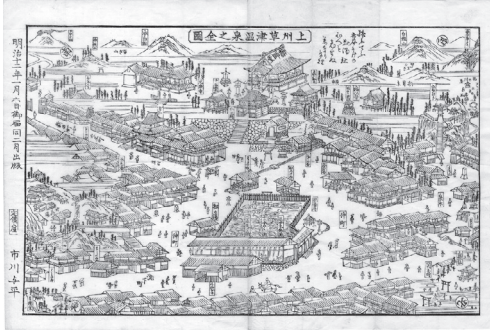


図4 「上州草津温泉之全図」  
(No.11, 1879年, 筆者蔵)

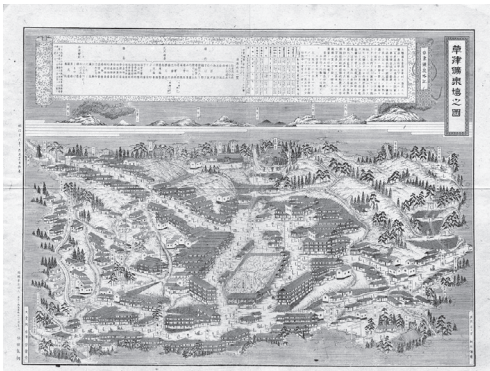


図5 「草津温泉場之図」  
(No.17, 1885年, 筆者蔵)

みられた<sup>31)</sup>。こうした都市鳥瞰図は、1820年代以降に草津を描いた図にも影響を与えたと推察される。

文化・文政期には、草津温泉の旅行者は夥しいものがあり、近世の中でも草津の黄金時代といわれる<sup>32)</sup>。十返舎一九が草津を舞台にした『上州草津温泉道中 続膝栗毛 十編』と『諸国道中金の草鞋 十三』を出したのは1820(文政3)年のことであった。このような旅の普及による草津の賑わいを背景に、鳥瞰図の刊行が盛んになったのであろう。

また、草津の鳥瞰図で銅板印刷が用いられ始めた図は、1885年のNo.17である(図5)。この図では多くの雲や霞を配置して遠景との関係を省略しているが、これは同じタイトル

で構図もよく似たNo.20とNo.25以外には見られない表現である。これらは、従来の図と比べると、やや視点が高くなっている。一方で、同時期のNo.16, No.18, No.19, No.21~24などは木版印刷であり、構図も図4に類似する。木版による刊行は、少なくとも1898年のNo.32まで続いた。さらに、平版印刷による図は1905年のNo.34から認められ、1910年代以降は多色刷りが主流となる。

文政期以来の構図から脱却して、より高い視点から温泉街の広がりを一望の下に描いたのは、阿部善吉が1903年に発行したNo.33であった(図6)。この図の右奥には、西の河原から殺生山までが連続して配置され、煙を吐く硫黄精錬場も描かれている。平面的な位置関係も読み取れるこのような描写は、のちの鳥瞰図にも影響を与えたことが見て取れる。これ以前にも、阿部は1897年に縦型の構図のNo.31を出したが、その後の図には採用されておらず、単発的な試みに終わっている。

1909年のNo.36から1922年のNo.43までは、萩原秋水作画のNo.41を除くと、構図と付随する情報が非常によく似ている。No.36は「上州草津温泉真景図」という図名の下に「HOT SPRING KUSATSU JIOSHU」と記さ



図6 「上州草津温泉場略図」  
(No.33, 1903年, 前橋市立図書館蔵)

れているが、これはNo.37, No.39, No.40も同じで、No.42, No.43では「JYOSHU」と改められたが、併記する形は変わらない(図7)。タイトルだけでなく、別枠に景勝地を掲げる点など、全体的なデザインも踏襲性が高い。

No.46の製作は松井天山で、温泉街の建物

や周辺の名所に詳しく文字注記をつけている。この図は、道路の配置が明確であり、草津電気鉄道と草津温泉駅、別荘分譲地、夜間スキー場、運動茶屋、囲山公園、西の河原公園なども、温泉街との平面的な位置関係がわかるように描かれている(図8)。

以上のように、構図については、近世から

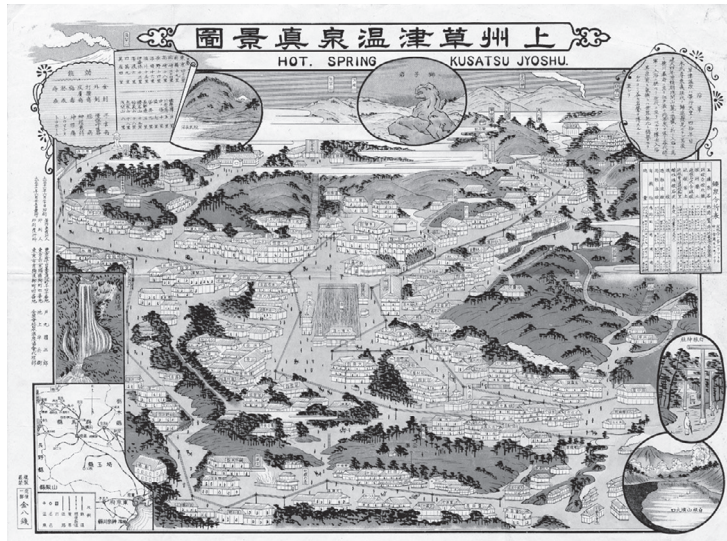


図7 「上州草津温泉真景図」(No.43, 1922年, 筆者蔵)



図8 「上州草津温泉鳥瞰図」(No.46, 1938年, 筆者蔵)

続いていた伝統的な描写が1900年代に入ると、より高い視点から広い範囲を俯瞰するようになった。1910年代から1920年代には、「真景図」のタイトルのもとで鳥瞰図のデザインが定型化した。1930年代には刊行点数が減少したが、そのなかで松井天山による独自の鳥瞰図が製作された。

いずれの図においても奥行き感はあまり強くない、建物や人物が距離に比例して小さくなってはいない。細部にわたる温泉街の情報の説明を優先したためであろう。

#### IV. 案内情報と描かれた図像

##### (1) 案内情報の特色

表2には、鳥瞰図に記載されている特徴的な案内情報の有無を示した。由来と効能は、大半の図で取り上げられている。由来には、No.1から繰り返し元正天皇、行基、源頼朝にまつわる来歴が語られていたが、No.36からは大和武尊東征の記述が加わっている。

温泉の成分は1880年のNo.13が初出で、熱の湯・鷺の湯・地藏の湯・御座の湯・滝の湯の5箇所成分表が示されている。その出典は『内務省衛生局雑誌』第1号に掲載の「熊谷県管下鉱泉分析表并医治効用」で1876年4月の発行である<sup>33)</sup>。このように科学的データを積極的に導入したかみえるが、その後の鳥瞰図ではデータの更新が全く行われず、同じ数値が使われ続けた。新しい成分表は、1938年のNo.46において1913年の分析結果が用いられるまで見出すことができない。ここでは、成分の内容ではなく、科学的に分析されたという事実が重視されたためであろう。

温泉番付は、それ独自にも発行されてきたもので、草津は東の大関という最高位に位置していた。そのため、図絵の部分の大きさを犠牲にしても、番付を掲載する価値があったのであろう(図9)。

また、里程(交通案内)は、頻度の高い情報となっている。街道に沿った地名や距離を

案内する形が長く続き、各地の地名とそのネットワークを図の周囲に配置する路程案内もみられた(図9参照)。鉄道網を入れた地図は1909年のNo.36から使われるようになった。これは、1915年の草津軽便鉄道の部分開業までは、軽井沢・渋川などからの移動には、徒歩、馬、駕籠、人力車に頼っていたためと考えられる。

八景とは、別枠のなかに八つの風景を描く形式をとっているものを示した。No.12では木の葉石と鬼の茶釜、白根山、郷社白根神、殺生川原、折目原、神供山、常布滝、西の河原、No.29では木の葉石、白根山、殺生川原、折目原、神供山、常布滝、西の河原、石尊山というように、図によって若干の違いが

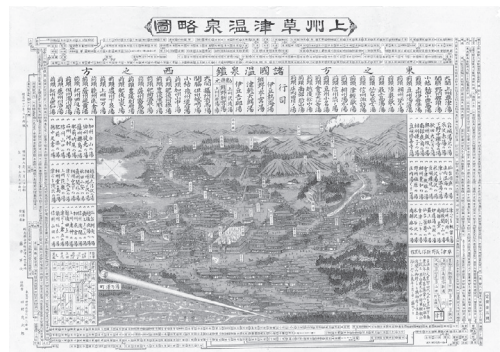


図9 「上州草津温泉略図」と部分拡大図 (No.35, 1908年, 筆者蔵)



表2 草津温泉鳥瞰図の案内情報と描写内容の変化

No	名称	発行年	由来	効能	成分	番付	里程	八景	電線	街灯	宿名	名所	乗物
1	上州草津温泉大図	1810	文化7	○	△	×	×	○	×	×	×	8	馬
2	上州草津温泉図	1812	文化9	○	△	×	×	○	×	×	×	8	馬
3	上州草津温泉図	1821	文政4	×	×	×	×	×	×	×	×	8	馬・駕籠
4	上州草津温泉之図	1825	文政8	○	△	×	×	○	○	×	×	8	馬
5	上州草津温泉略図	1827	文政10	○	×	×	×	○	×	×	×	7	馬
6	上州草津温泉の図	1840?	天保11?	×	△	×	×	○	×	×	×	7	馬・駕籠
7	上州草津温泉之図	1853	嘉永6	○	×	×	×	○	×	×	×	8	馬
8	上州草津温泉之図	1855	安政2	×	×	×	×	○	×	×	×	8	馬
9	上州草津温泉之図	1856	安政3	○	△	×	×	○	×	×	×	8	馬
10	上州草津温泉之図	1859	安政6	×	×	×	×	×	×	×	×	8	馬
11	上州草津温泉之全図	1879	明治12	×	×	×	×	×	×	×	×	7	馬
12	上州草津温泉図并八景	1879	明治12	×	×	×	×	×	○	×	×	6	-
13	上州草津温泉之略図	1880	明治13	○	×	○	×	×	×	×	×	7	駕籠・人力車
14	上州草津温泉之全図	1881	明治14	○	○	×	×	○	×	×	×	5	駕籠
15	上州草津温泉図并八景	1884	明治17	×	○	×	×	○	×	×	×	6	-
16	上州草津温泉之全図	1885	明治18	×	×	×	×	×	×	×	×	7	馬・駕籠
17	草津鉱泉場之図	1885	明治18	×	○	○	×	×	×	×	×	2	駕籠・人力車
18	上州草津温泉之全図	1887	明治20	○	○	×	×	×	×	×	×	5	-
19	上州草津鉱泉全図	1887	明治20	○	○	○	○	○	×	×	×	3	人力車
20	草津鉱泉場之図	1888	明治21	×	○	○	×	×	×	×	×	2	駕籠・人力車
21	上州草津温泉之全図	1888	明治21	○	○	×	×	○	×	×	×	5	馬・駕籠
22	上州草津鉱泉全図	1889	明治22	×	○	○	×	×	×	×	×	4	人力車
23	上州草津温泉図	1890	明治23	○	○	×	○	×	○	×	×	7	馬・人力車
24	上州草津温泉図	1891	明治24	○	○	×	○	○	○	×	×	6	人力車
25	草津鉱泉場之図	1891	明治24	×	○	○	×	×	×	×	×	2	駕籠・人力車
26	上州草津温泉図	1892	明治25	○	○	×	○	×	○	×	×	7	馬・人力車
27	上州草津鉱泉全図	1893	明治26	○	○	○	○	○	×	×	×	5	人力車
28	上州草津温泉図	1893	明治26	○	○	×	○	×	○	×	×	7	馬・人力車
29	上州草津温泉図	1896	明治29	○	○	×	○	×	○	×	×	7	馬・人力車
30	上州草津温泉全図	1896	明治29	○	○	○	○	○	×	×	×	5	人力車
31	上州草津温泉場真図	1897	明治30	○	×	○	×	×	○	○	×	3	駕籠・人力車
32	上州草津温泉全図	1898	明治31	○	○	×	○	○	×	×	×	5	人力車
33	上州草津温泉場略図	1903	明治36	○	○	×	×	○	×	○	○	5	馬・人力車
34	上州草津温泉場略図	1905	明治38	×	○	×	×	×	○	○	○	5	馬車
35	上州草津温泉略図	1908	明治41	○	×	×	○	○	×	○	×	4	人力車
36	上州草津温泉真景図	1909	明治42	○	○	×	×	○	×	○	○	2	馬・人力車
37	上州草津温泉真景図	1914	大正3	○	○	○	×	○	×	○	○	1	馬・人力車
38	上州草津温泉真景図	1914	大正3	○	○	×	×	○	×	×	○	3	馬車・人力車
39	上州草津温泉真景図	1916	大正5	○	○	○	×	○	×	○	○	1	人力車
40	上州草津温泉真景図	1917	大正6	○	○	○	×	○	×	○	○	1	自動車・人力車
41	上州草津温泉真景図	1920	大正9	×	×	×	×	×	○	×	○	3	自動車・馬車・馬・人力車
42	上州草津温泉真景図	1920	大正9	○	○	○	×	○	×	○	○	1	自動車・馬・人力車
43	上州草津温泉真景図	1922	大正11	○	○	○	×	○	×	○	○	1	自動車・自転車・馬・人力車
44	上州草津温泉案内図	1926	大正15	×	○	○	×	×	○	○	○	2	馬・人力車
45	上州草津温泉真図	1932	昭和7	×	×	×	×	○	×	○	○	5	自動車
46	上州草津温泉鳥瞰図	1938	昭和13	×	○	○	×	○	×	×	○	5	自動車

注) 効能を別枠でなく図絵の中に記載するものに△を付した。名所とは近世以来の「常布の滝、水谷、殺生河原、西の河原、鬼の茶釜、鬼の角力場、木の葉石、ゆるぎ石」のうち、いくつ示されているかを数えた。

ある。折目原，神供山は，明治以降に取り上げられるようになった場所である。その後，No.36～40，No.42～43にも別枠に景勝地の描写があるが（図7参照），8という数へのこだわりはみられない。

## （2）描かれた図像の変化

近世以来の名所は，長く描かれ続けた。しかし，名所の数をみると（表2参照），やや減少傾向にある。鬼の茶釜と鬼の角力場は，No.30から全く示されなくなる。さらにNo.36以降になると，木の葉石とゆるぎ石がほとんどみられない。これらの名所が描かれなかったのは，その規模が小さいためであろう。反対に，最も多く描かれているのは西の河原で，上記の四つの名所もその一部となっていた。西の河原に次いで多いのは，常布の滝である。ただし，No.36以降に別枠で描かれたのは，媼仙（翁仙）の滝で，絵はがきの写真もほとんどがこの滝を採用しており，名所の変化の一例となっている。

電線と街灯は，近代化を象徴する図像として描かれたといえる。いずれも1897年のNo.31が初出である。1908年のNo.35までは，郵便電信局から1本の電線が伸びている。草津において電信の取り扱いが開始されたのは1897年で，いち早くその図像が取り込まれたのである。1914年のNo.37からは，温泉街を巡る電線網となる。1910年に加入者24台で電話の架設が始まったので，そのネットワークを描いたものであろう。

草津に電灯が点いたのは，草津水力電気株式会社の開業した1919年のことで，それ以前の街灯はオイルランプであったと推察される。電灯の普及によって，ランプは土蔵の隅に片付けられ，あるいは農村に余命を委ねることになったという<sup>34)</sup>。電線の描写は，他地域の鳥瞰図でも認められる<sup>35)</sup>。今日，電線は景観を阻害する要因として扱われることが多いが，鳥瞰図には電信電話や電灯を導入した

シンボルとして，積極的に書き込まれていたと考えられる。

交通案内の情報は，草津の鳥瞰図では詳しくない。ただし，図像の中には，乗り物を利用した人びとの姿を見つけることができる（図10，表2参照）。標高1200mの高原に位置する草津温泉に至る道路は，急坂かつ悪路だったため，改修が行われるまでは，馬がおもな交通手段であった。草津馬車合資会社の成立は1897年頃だが，馬車の図像はわずしか認められない。一方で，自動車は1917年のNo.40以降は数多く描かれる図像となる。草津に自動車が導入されたのは1911年頃であったが，このときは採算がとれず1年で休業となった。1919年に草津軽便鉄道が嬭恋まで開通すると，嬭恋・草津間の自動車営業が活況を呈した。自動車の図像は，草津への移動手段の変革を示したもので，1930年代の図では，自動車のみが描かれている。

草津温泉は，1926年の軽井沢と草津を結ぶ電気鉄道の全線開通や，1935年の渋川・草津間の省営バス運行などを契機に，伝統的な湯治場の役割を残しつつも，一般の旅行者を多く迎える観光地へと変容した<sup>36)</sup>。図11をみると，宿数は1907年は57軒であったが，1910年代後半には70軒台で推移し，1930年代に入る

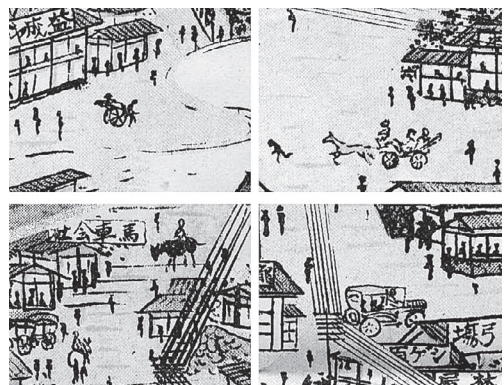


図10 人力車・馬・馬車・自動車の図像  
〔上州草津温泉真景図〕(No.41, 1920年, 筆者蔵)より

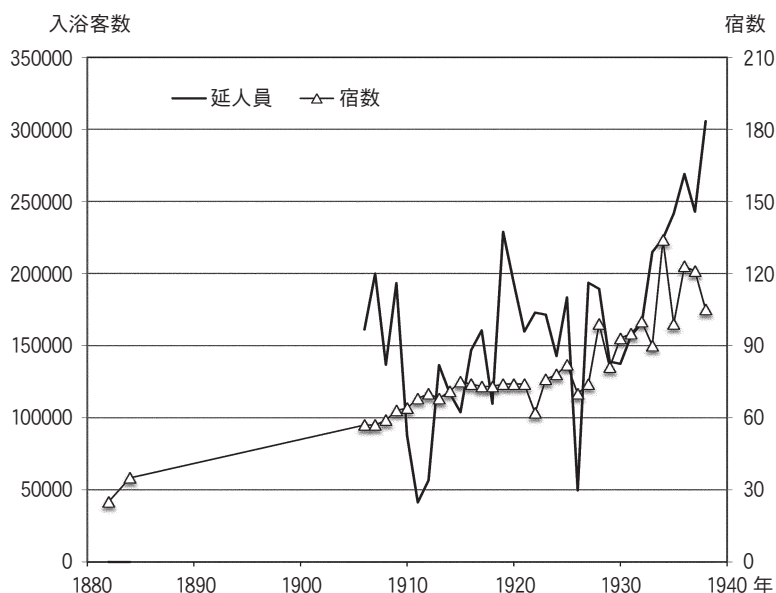


図11 草津温泉の入浴客数と宿数の推移  
『諸国温泉遊覧記』『上毛草津鉱泉独案内』『群馬県統計書』より作成

と90軒以上となっている。入浴客数の延人員も年ごとの変動が大きいものの、1920年頃からは右肩上がりに伸びている。鳥瞰図の視点が高くなり、温泉街の描かれる範囲が広がりをみせたのは、このような地域の変化を反映したものであった。

### (3) 共同浴場の変遷

草津温泉の特色は共同浴場の多さにある<sup>37)</sup>。鳥瞰図でも共同浴場は欠かすことができない図像であった。それとは逆に、個々の旅館に文字注記が付けられるのは、1903年のNo.33からで(表2参照)、他の温泉地と比べてかなり遅い<sup>38)</sup>。草津の湯治では、旅館の内湯よりも共同浴場を利用することが一般的であったためと考えられる。

表3には、主要な共同浴場の描写の有無を示した(位置は図1参照)。この表では、前後で変化がない図の情報は省略している。

湯畑に設けられていた打たせ湯には、12本

薬師滝、2本天狗滝、3本不動滝の注記が長く付けられていたが、1897年頃から大滝の湯、のちに滝の湯と表記が変わった。ただし成分分析表にあったように、湯名としては滝の湯が使われていた。図像をみると、浴場の建物が次第に整えられていったことが読み取れる。

薬師堂の下にある御座の湯は、ハンセン病患者の居住区を湯ノ沢に設置するとき、この病に特効ありと信じられていたため移設され、その跡に新築された浴場が白旗の湯と命名された<sup>39)</sup>。これは角田浩平戸長(任期1886~1889年)による事業で、1888年の案内書には、白旗の湯(元御座の湯)と新御座の湯の両者が記されているので<sup>40)</sup>、この時までには整備が行われたと判断できる。1888年のNo.20には、文字注記を欠くが、新たな建物が描かれている。鳥瞰図における描写は、御座の湯から白旗の湯への改称を正確に反映していることがわかる。

表3 主要な共同浴場の描写の有無

	No.1	No.2	No.4	No.5	No.6	No.7	No.10	No.11	No.17	No.18	No.20	No.22	No.27	No.30	No.31	No.33	No.36	No.37	No.40	No.43	No.45	No.46	
	1810	1812	1825	1827	1840?	1853	1859	1879	1885	1887	1888	1889	1893	1896	1897	1903	1909	1914	1917	1922	1932	1938	
薬師滝・天狗滝・不動滝	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
大滝の湯／滝の湯				○											○	○	○	○	○	○	○	●	●
御座の湯／白旗の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
熱の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
鷺の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
綿の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
脚気の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
地蔵の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
滝湯／琴平滝／琴平の湯	○	○	○	○																			
煮川の湯			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
松の湯						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
千代の湯						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
瑠璃の湯						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
玉の湯						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
富の湯						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
風の湯						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関の湯						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○						

図番号は表1、表2と同じ。△：浴場の建物があるが文字注記を欠く、●：名称の変更。

千代の湯は、大滝の湯の滝下にあったが、1884年頃には廃止され浴槽のみがあるという状態にあった<sup>41)</sup>。同じ1887年発行の鳥瞰図において、No.18では大滝の湯下に、No.19ではそこから離れた現在の位置に描かれており、この頃に移転したと考えられる。

1936年には、共同浴場として、時間湯が行われている熱の湯・鷺の湯・地蔵の湯・松の湯・千代の湯、一般の浴場である滝の湯・白旗の湯・煮川の湯・瑠璃の湯・風の湯・関の湯、ハンセン病患者向けの御座の湯・籬の湯・桜の湯があった<sup>42)</sup>。時間湯とは、湯長の指揮にしたがい、湯もみを行い、頭部に湯をかけ、高温の湯に3分間浸かるという入浴法であり、湯治客の多くが利用した。そのため、時間湯の方が設備も整い、収容力が大きかった。

表3に掲載した共同浴場と比べると、1936年のリストには、綿の湯・脚気の湯・玉の湯・富の湯・琴平の湯がない。琴平の湯以外の4箇所は1910年の『草津町郷土誌』の付図に記載がみられないので<sup>43)</sup>、この頃までに廃

止されたといえる。この変化は鳥瞰図の描写とも一致する。

このように共同浴場は、その変遷を忠実に反映して鳥瞰図に描かれてきたことがわかる。しかし、瑠璃の湯・風の湯・関の湯のように、当時存在しながらも、鳥瞰図に描かれていない共同浴場があったことにも注目したい。これは、時間湯であるか否か、湯治客向けか地元住民向けか、規模の大小などを基準に、描くべき浴場の取捨選択が行われていたためと推察される。

## V. おわりに

草津温泉は古来より知られる名湯で、近世以来、数多くの鳥瞰図が土産物として刊行されてきた。それゆえ、出版点数が多く、経年的な考察が可能であった。

19世紀初期、都市鳥瞰図が流行するなかで、草津においても温泉街を俯瞰する図が1820年代から刊行されるようになった。鳥瞰図の視点は北東から南西を向き、湯畑の末端にあった打たせ湯を手前に、薬師堂を奥に描

く構図が定番となっていた。

鳥瞰図の伝統的な構図は、明治に入っても継続的に用いられた。このような構図から脱却して、より高い視点から温泉街の広がりを一望の下に描いたのは、1903年のNo.33であった。さらに1910年代から1920年代にかけては「真景図」のタイトルのもと、酷似したデザインの鳥瞰図の発行が続いた。

鳥瞰図には、電信・電話・電気や自動車の導入といった近代化を象徴するイベントがあれば、それを伝えるための図像が取り入れられていた。また、草津の特色である多くの共同浴場は、温泉の成分や効能の案内とともに、鳥瞰図に描かれており、改廃などの実態を忠実に反映していた。

文字注記は、共同浴場、名所、寺社、町名などに限られていたが、のちに旅館や商店などにも付されるようになった。一般の住戸にはみられず、あくまで、旅行者に向けての案内が主題となっていたといえる。また、文字注記が建物に網羅的に付されるようになるのは、20世紀に入ってからであり、湯治場から観光地へと次第に変容を始めた時期と対応している。

なお、表1に掲げた鳥瞰図の作成主体には草津鉱泉取締所（のちの草津温泉組合）がみえないが、1928年に発行された金子常光の鳥瞰図「草津温泉図絵」のカバーにその記載がある。タテ15cm×ヨコ53cmの折り本で、著作・発行所は草津印刷株式会社となっているが、取締所が配布したものと考えられる。草津鉱泉取締所は、1915年の草津軽便鉄道の一部開業を契機に、案内書・リーフレットの発行や新聞・ラジオによる宣伝活動を活発に行うようになっていた<sup>44)</sup>。

常光の鳥瞰図では、温泉街は簡略化されて小さく、図のごく一部を占めるに過ぎない。横手山・白根山・四阿山・浅間山の山並みが画面いっぱい描かれており、高原観光地としての草津を強調しているようにみえる。温

泉組合が1930年代に発行したリーフレットでは、スキーやハイキングが宣伝されており、鳥瞰図の表現と一致している。

こうしたタイプの鳥瞰図は、草津ではほとんど確認できないが、多くの観光地では、交通ネットワークの整備とともに主流となっていた。ただし、本稿で行ったような市街地内部を詳細に検討する素材としては適していない。

「近代の歴史地理」の研究には、まだ活用されていない膨大な資料が存在する。鳥瞰図はその一つである。鳥瞰図を分析することで、景観復原の手がかりを得られるだけでなく、文字記録には残っていない情報を引き出すことが可能である。また、鳥瞰図ごとに個性を見出しやすく、当時の社会的背景を踏まえながら、図像に込められたメッセージを読み解くこともできる。ただし、その前提として、鳥瞰図に対する資料批判が必要であり、研究の素材としての位置づけを明確にすることが求められる。そして、残された同時代の文字記録と照合を行いつつ考察すれば、鳥瞰図の制作経緯なども検討できよう。

紙幅の関係もあり、本稿は草津温泉の鳥瞰図に関する全体像の概要を示したにすぎない。個々の図像の分析を詳細に行えば、さらに多くの知見が得られるであろう。この点については、別の機会に行いたい。また、本稿では、案内書・絵はがき・写真帖・リーフレットなど、その他のメディアとの関係について十分に検討することができなかった。今後の課題としたい。

(群馬大学)

#### 〔付記〕

本稿の作成には、平成21-23年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）代表者・関戸明子「メディア分析による近代日本におけるツーリズムの展開に関する研究」課題番号(21520789)を使用した。

〔注〕

- 1) 長谷川孝治「地図史研究の現在—1980年の英米の動向を中心に—」人文地理45-2, 1993, 40-61頁。
- 2) ①葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上』地人書房, 1988, ②葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 下』地人書房, 1989。
- 3) 古田悦造「神奈川県相模原における地籍図(地引絵図)の作成過程」前掲2) ①226-247頁。
- 4) 小川都弘・小林致広・久武哲也「絵図分析の枠組」前掲2) ①11-47頁。
- 5) 中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版, 2008。
- 6) 矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房, 1984, 33頁, 203頁。
- 7) 大久保純一「広重と江戸鳥瞰図」国立歴史民俗博物館研究報告109, 2004, 21-45頁。
- 8) 岸 文和『江戸の遠近法—浮絵の視覚—』勁草書房, 1994。
- 9) 大久保純一『広重と浮世絵風景画』東京大学出版会, 2007。
- 10) 例えば, 神奈川県立歴史博物館編『横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀』神奈川県立歴史博物館, 1997。堺市博物館編『パノラマ地図を旅する—「大正の広重」吉田初三郎の世界』堺市博物館, 1999。神戸市立博物館編『絵図と風景—絵のような地図, 地図のような絵』神戸市立博物館, 2000。
- 11) 海野一隆「江戸鳥瞰図の創始者」月刊古地図研究8-9, 1977, 1-11頁。
- 12) ①矢守一彦「京の一覧図について」『古地図と風景』筑摩書房, 1984, 203-231頁。②矢守一彦「地図と風景画のあいだ」『古地図への旅』朝日新聞社, 1993, 25-57頁。
- 13) 岸 文和「菊屋版《うきゑ京中一目細見之圖》について—はじめての「都市鳥瞰圖」—」國華 1214, 1997, 5-15頁。
- 14) 辻 惟雄「空飛ぶ絵師の眼—蕙齋・北齋・貞秀」(辻惟雄編『激動期の美術—幕末・明治の画家たち〔続〕』ペリカン社, 2008), 9-31頁。
- 15) 前掲7)。
- 16) ヘンリー・スミス「一覧図の政治学—幕末における五雲亭貞秀の国土像」, 黒田日出男・M.E.ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会, 2001, 103-134頁。
- 17) 杉本史子「時事と鳥瞰図—幕末, 新たな空間の誕生と五雲亭貞秀」千葉県史研究16, 2008, 45-67頁。
- 18) 例えば, 堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む—描かれた近代日本の風景』河出書房新社, 2009。
- 19) 湯原公浩編『別冊太陽 大正・昭和の鳥瞰図 絵師 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社, 2002。
- 20) 中西僚太郎「鳥瞰図絵師・松井天山の画業と画風」地理学研究報告(千葉大学) 13, 2002, 11-20頁。中西僚太郎「昭和初期の千葉市街を描いた鳥瞰図」前掲5) 103-118頁。
- 21) 中西僚太郎「明治・大正期の松島を描いた鳥瞰図」前掲5) 63-80頁。中西僚太郎「明治・大正期の松島, 巖島および和歌浦に関する案内記・写真帳・鳥瞰図」地理学研究報告(千葉大学) 18, 2007, 15-28頁。中西僚太郎「明治・大正期の巖島を描いた鳥瞰図」歴史人類 38, 2010, 59-83頁。
- 22) ①関戸明子「鳥瞰図に描かれた伊香保温泉の景観」えりあぐんま8, 2002, 23-40頁。②関戸明子「四万温泉の鳥瞰図を読む」えりあぐんま10, 2004, 5-24頁。③関戸明子「熱海温泉の鳥瞰図の特色と表現内容」前掲5) 45-62頁。
- 23) 筆者所蔵の図の画像は次のアドレスで公開している。紙幅の関係で多くの図は掲載できないので参照されたい。<http://www.edugunma-u.ac.jp/~sekido/Tourism/index.html>
- 24) この点に関しては次の論考がある。三木理史「奈良絵図屋作成地図の地理学的研究」(奈良大学総合研究所編『大和・奈良地域の観光に関する学術研究』奈良大学総合研究所, 2002), 118-132頁。三木理史「奈良絵図屋にみる地図出版の近世・近代」前掲5) 40-44頁。
- 25) 前掲22) ③。

- 26) 佐藤曾平『草津町史』佐藤曾平, 1938, 15-46頁。
- 27) 萩原太郎『草津温泉』草津鉱泉取締役所, 1922。
- 28) 源泉が「湯畑」と呼ばれるようになったのは、草津町が湯畑に設置する案内板によれば1907(明治40)年頃とされる。ただし例外的に「湯島は一名大湯と称し」という早い用例がある(①長井文靖『上毛草津鉱泉独案内』長井文靖, 1884, 9頁)。案内書では「御波上の湯」とあったのが(②松永彦右衛門『上州草津温泉誌』松永彦右衛門, 1905, 2頁)、数年で「湯畑」が用いられている(③萩原太郎『草津温泉』草津鉱泉取締役所, 1908, 7頁)。鳥瞰図では案内書より早くNo.33(1903年)とNo.34(1905年)に「湯畑ケ」の記載があり、以後の鳥瞰図でも定着している。
- 29) シンポジウム後に入手した豊原周春の「上州草津温泉之図」(刊年不明)が、唯一の例外となっている。この図は、南東から北西に俯瞰して、湯畑を横から眺めており、薬師堂を左手、白根神社を右手に置く。
- 30) 関戸明子「絵はがきから草津温泉の景観を読む」えりあぐんま17, 2011, 43-56頁。ちなみに、現在は建物の高層化と樹木の生長によって、絵はがきと同じように湯畑を見ることはできない。
- 31) 前掲12) ②。前掲13)。
- 32) 萩原 進「来遊の文雅人」(草津町誌編さん委員会編『草津温泉誌 第壹巻』草津町役場, 1976), 1117-1123頁。
- 33) 関戸明子『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版, 2007, 10頁。
- 34) 通信・電気・交通などの事業の沿革については、前掲26) 82-122頁。
- 35) 前掲33) 70-73頁。
- 36) 関戸明子「戦前期における鉄道旅行の普及と草津温泉の変容」(神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ』ナカニシヤ出版, 2009), 16-25頁。
- 37) 近現代の温泉利用については、関戸明子「コモنزとしての温泉—草津における温泉の利用・管理の事例を中心に」(谷口真人編『地下水流動—モンスーンアジアの資源と循環』共立出版, 2011), 222-243頁。
- 38) これまで確認した鳥瞰図に限られるが、宿名の表記は、熱海1829年, 日光湯本1873年, 四万1884年, 那須1887年, 伊香保1892年, 塩原1892年の刊行図にみられる。
- 39) 前掲26) 190-192頁。
- 40) 湯本平内『草津温泉誌』湯本平内, 1888。
- 41) 前掲28) ①17頁。
- 42) 中村舜二『天下の草津温泉』大東京社, 1936, 26-28頁。
- 43) 前掲36)。
- 44) 前掲35)。